北海道循環器

MSW・ケアマネ連携調査

病棟受け持ち制「満足」8割

中央区の北海道循環器病院（大堀克己理事長、堀田大介院長・95床）は、入退院支援体制の強化に向けて、地域のケアマネジャーに、MSWとの連携に関するアンケートを実施。大部分のケアマネは、同病院の窓口としてMSWが十分に機能していると実感していることが分かった。

同病院は、MSW5人、退院調整看護師1人で入退院支援部門を組織し、2、3階病棟とCCU・ICUに配属する病棟受け持ち制を採用。各病棟のMSWが直接、ケアマネと連絡を取り合っている。

アンケートは、2017年9月～18年6月に入院した患者の担当で、入退院時にMSWと介護サービスについて連携したケアマネ91人を対象に実施した。

「担当する利用者が入院した際、担当MSWは明確だったか」については、「とても明確」36人（40・4％）、「明確」38人（42・7％）と、多くのケアマネからMSWが窓口の役割を果たしていると認識されていた。

患者の入院後、翌営業日までに、病名、治療内容、入院期間について満足いく情報交換ができているか否かでは、「満足」61人（67・8％）、「やや満足」16人（17・8％）で、合わせると8割を超えた。

退院のめどがたった時点で、病名、治療経過、ADLの状況、必要な処置・継続する医療行為、食事内容、退院日の目安、今後の受診予定を担当ケアマネと情報共有していることに関しても、8割以上が「満足」「やや満足」と回答した。

自由記載で多く出てきたキーワードを抽出したところ、「すぐに連絡」22回、「詳しく」11回、「丁寧」10回が目立ち、スピード感や密な連絡が重要であることが分かったという。

平均在院日数が10日を切る中で、入退院支援部門では、退院困難者を抽出するツールを独自に開発。「入退院支援加算」に関わる情報共有を進めるとともに、効率化を進めている。

こうした取り組みもあって、16年度に338件だった介護支援連携指導料の算定数は、17年度に489件へと増加。退院前カンファレンスの開催も66件から124件に倍増した。

アンケートを実施した安西一平主任MSWは、「ケアマネも入退院支援チームの一員として、協働する視点が重要」と訴えている。

退院前カンファレンスの開催が増えてる